


活動實踐事例



活動実践事例 小

交流・ 共同学習

教科・領域	特別活動（交流及び共同学習）
名称	直接交流が難しい時期の交流学習の実施について
写真 使用方法	<ul style="list-style-type: none"> ● 小学部は、10月に大阪市立中津小学校と、1月に大阪市立豊崎小学校（1月）と交流学習を行っている。 ● 今年度は、感染症等への対策として来校による児童館の直接交流は行わず、学校紹介や学習や休み時間の様子を撮影した動画（ビデオレター）とボッチャ、カローリング、夏のつどいで児童が計画した遊びの物品を届けた。 ● 相手校からも、返信のビデオレターや育てたお花の苗が届いた。 
対象児童生徒 学年・グループ	<ul style="list-style-type: none"> ● 中津小学校との交流： 全学年 ● 豊崎小学校との交流： 小学部1～3年生
素材・作り方等	<ul style="list-style-type: none"> ● タブレット端末を活用。学習グループによっては、児童たちで動画を撮影する場所や内容を事前に考え、撮影も自分たちで行っていた。 ● 貸出する物品を使った動画も撮影し、パラスポーツの紹介も行うことができた。
使ってみて (効果・反省等)	<ul style="list-style-type: none"> ● 前年度までもインフルエンザ等の流行による交流中止や延期があったが、今年度のような交流の形を案の一つとして準備しておくことで交流学習を中止せずに実施することができる。 ● 相手校の学校や授業の様子を動画で見ることができ、同じところや違いに気づくことができ、本校にとっても交流学習の幅が広がった。 ● 今年の経験を発展させ、共同学習等へICTを活用しながら更に深めていくことができる機会となった。
保管場所 又は所有者	本校 教材室、多目的ホール倉庫、本校HP（ブログ参照）



教科・領域	自立活動
名称	発達を理解した食べる支援
使用方法	<ul style="list-style-type: none">● 噛む動きが育っているかの観察項目<ul style="list-style-type: none">① 左右の口角は非対称に動いているか② 噛んでいる顎のほうに、唇が引っ張られているか③ 舌は横に動いているかどうか● 唇を閉じる力が弱い 唇を閉じて食べ物を取り込んだり飲み込んだりする機能は「離乳初期」に獲得されるが、色々な原因でいつまでもこの力が弱いときには、「唇を閉じる介助」をしたり、「口輪筋のマッサージ」をして、閉じる力をつけていく。● むせる状態 飲み込むときには、「呼吸」と「嚥下」の動きが動きが上手く協調しないといけない。つまり、飲み込む瞬間には呼吸が止まっていて、飲み込んだ後にもまた呼吸が始まります。このタイミングがうまくいかないと、息を吸うと同時に食べ物も吸い込んでしまったりするので、むせがおきてしまう。鼻から息ができずに口からばかり息をしている子では、このタイミングのずれが起きやすくなります。鼻の病気でつまったりしていないようであれば、口を閉じて鼻で息をする練習を試してみる。● 姿勢 きちんとした姿勢をとることは、食事にとってとても大切である。噛んだり飲み込んだりするために使う筋肉をリラックスさせるような姿勢を作ってあげる。あまり体や頭を倒しすぎると、重力のままにのどのほうに食べ物が落ちていってしまい、かえって食べにくくなります。体の状態に合わせて少しずつ起こしていき、上手にたべられるようにして、徐々にまっすぐに座って食べることを目指していきます。食べるためには、口のまわりや首のなどの筋肉だけでなく、全身がリラックスしていることが必要。関節を適度に曲げるように、全体としてやや丸くなるような姿勢をとると、不必要な緊張をしにくくなる。
対象児童生徒	小学部 3 年生
(効果・反省等)	1 学期の喫食後、担当児童の ST の見学を行い、実態に合わせた食べさせ方等の話し合いを重ね、研修と置き換えた。



活動実践事例 小

自立活動

- 対象児童： 小学部 4 年生 男子
- 主たる病名等： 脳性まひ
- 障がいの型・部位： 痙直型・四肢麻痺

- 取り組み内容：

日頃は児童椅子で学習している。移動手段は座位保持椅子であるが、ウォーカーや介助歩行も好んで取り組んでいる。何事にも興味を持ち、やる気がある児童である。

スパイダーでは、児童はジャンプをすることを目標に取り組んでいる。そのため、スパイダーの時のみ大阪整肢学院よりハイカット型のシューズを借りている。また、学校としては下肢（膝）をうまく使うこと、下肢の筋力向上を目標に取り組んでいる。

まず初めに、箱いすやバルーンを使用して、膝をしっかり曲げてからの立ち上がりに取り組んでいる。【写真1・2】足底がずれ、膝が外に開きながら屈曲することがあるため【写真2】児童に意識させるための言葉かけ、また後ろからの介助をしている。

その後、ジャンプに取り組んでいる。【写真3】

- 取り組み成果：

スパイダーでは立ち上がりを中心に取り組んでいる。まだ、膝を曲げてからのジャンプをすることは難しいが少しずつ身体の使い方を意識できるようになってきた。立ち上がりの際も身体が後ろになるようにしていたのが、前方に向かって立ち上がることも意識できつつある。まだ定着まではいかないが児童が意識することはできてきた。

また、スパイダー後の介助歩行では、児童より「歩きやすくなった」と言っていた。

訓練士とも相談し、見学してもらった時には、太もも裏のストレッチには効果があると言われた。太もも裏が硬いため柔軟性を高める動きとして効果があると言われた。



【写真1】



【写真2】



【写真3】



活動実践事例 ④

自立活動

- 対象生徒： 中学部 1 年生 男子
 - 主たる病名等： 染色体異常
 - 障がいの型・部位： 四肢弛緩性麻痺
 - 個別の指導計画目標： 日常生活に必要な姿勢と運動・動作の基本的技能を習得する。
-
- 日頃の取り組み： 覚醒と緊張の低いことが多い【写真 3】ので、身体をさすったりタッピングしたりするなどして覚醒を促すことがある。椅子での座位や立位台にてヘッドコントロールや興味があるものに触れる手指動作、目と手の協応などに取り組んでいる。また、普段行うことが困難な姿勢や動作を経験させることもある。
 - 成果： スパイダーにて、椅子での座位を安定させ【写真 1】、合同自活（OT）での取り組みを参考にし、玉そろばんを手や腕を動かして転がしたり、バチを握ってタンバリンをたたいたりしている。【写真 2】最近では、キーボードのデモ演奏を流すと追視することがある。姿勢に関しては四つ這い位を経験し、免荷された上体を 5 秒程度上肢で支えながらヘッドコントロールすることができた。【写真 4】【写真 5】



【写真 1】 ↑



【写真 2】 ↑



【写真 3】 ↑



【写真 4】 ↑





【写真 5】 ↑

- 今後の展望・課題： 免荷率を下げた状態での四つ這い位、または、膝立ちなども経験できる可能性があるのではと考える。



活動実践事例 高



自立活動

教科・領域	自立活動（高等部）
名称	スパイダー（重力免荷装置）
写真 使用方法	  <p>導入時： 10月2日 指導 4 回目： 12月 4日</p> <p>スパイダーは、びわこ学園の高塩純一氏が日本に導入した。1G の重力下では経験できない身体の動きを子どもたちが楽しく経験し、自らの力で動きたい、遊びたいという心と、運動学習を可能とする訓練機器である。写真のように、ゴムを使って体重を重力から免荷する。</p>
対象児童生徒 学年・グループ	高等部 FG グループ 2 年生
素材・作り方等	重力免荷装置（スパイダー）
使ってみて （効果・反省等）	<p>本生徒は、脚長差があり右靴型装具の底に約 8cm の補高があるが、本生徒なりの運動機能を獲得し、体を動かすことを楽しむことができている。今回、重力を免荷することにより、重力下ではできないジャンプができた。重力が免荷され普段より筋力を大きく使えることに、本生徒の場合開放感を味わい、教員の提示するさまざまな活動を積極的に受け入れ、自分で実行しようとする態度が見られた。</p> <p>反復横とびのように、下肢を外転させ側方に踏み出す運動は、日常生活の中で本生徒が行う場面を見たことがなかった。スパイダーの中で、フラフープを 3 つ床に並べると、教員の動きを見て、自分の手足の運動にフィードバックして運動企画、実行することができた。</p> <p>高塩純一氏は、スパイダーを活用する際、プレイフルな活動をさせたいと言っている。また四天王寺やわらぎ苑理学療法士の榎勢道彦氏は私たちにスパイダーのさまざまな使い方を提案している。単なる免荷装置として活用するだけでなく、子どもの動きを引き出すための機器として教育的効果を狙って活用していきたい。</p>
保管場所 又は所有者	本校 2階ホール



活動実践事例 高

自立活動

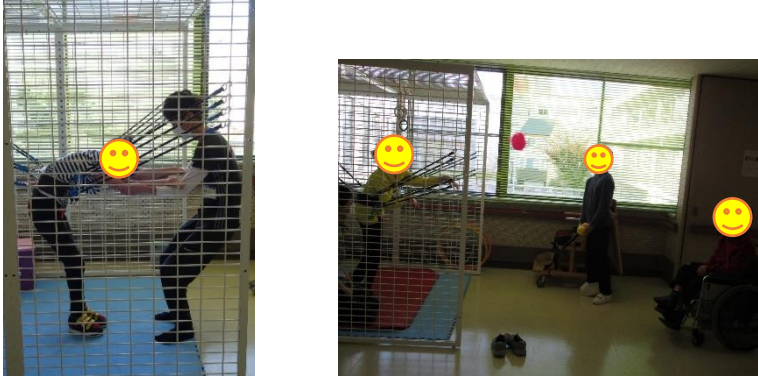
教科・領域	自立活動（高等部）
名称	スパイダー（重力免荷装置）
写真 使用方法	<div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p style="text-align: center;">導入時： 10月2日 第4回目： 12月4日</p> <p>本生徒の使用にあたっては、下肢の感覚に障がいがあるため、衝撃を和らげるため、エアレックスマットを下に敷く。</p>
対象児童生徒 学年・グループ	高等部Fグループ 1年生
素材・作り方等	重力免荷装置（スパイダー）
使ってみて （効果・反省等）	<p>下肢の感覚障がいがある。学院では独歩であるが学校では車いすを利用し、独歩することはほぼない。スパイダーの利用の前段階として、合同自立活動で理学療法士に本生徒がスパイダーを使う上での留意点を聞いた。理学療法士から、かかとに傷を作ると悪化して歩行できなくなることがあると聞き、初回時はゴムベルトの位置を4番にし、免荷率を上げて取り組んだ。足底接地した状態でゴムベルトを着けたが、下肢伸展状態で膝を反張し、足底を宙に浮かしてしまった。2回目の指導時に合同自立活動を利用し、理学療法士から足底への衝撃を減らすためにエアレックスマットを床に敷くようにと助言いただいた。その後、ゴムベルトの位置を7番まで下げかかとへの荷重をおこなった。本生徒の場合、歩行時も踵足となり、足底のあおりがほぼない。裸足で前足部を使う感覚を覚えてもらいたいと思い、つま先立ちができるように高めにゴムベルトを設定していた。しかし目標とする運動を導き出ことはできなかった。そこで、まずはさまざまな運動を経験することから始めようと、足を左右に動かしやすいように環境を視覚支援し、床にフラフープを置いた。すると左右のフラフープに足を動かそうとする動きがみられた。また、ファシリテーションボール（ボールの空気をわざと抜いて、手指を使い持ちやすくした）を使ってキャッチボールを楽しみ、遊びの中で重心移動を行いながら、自分の運動をコントロールする経験をした。体性感覚の中枢である脳の前庭核を刺激し、ミラーニューロンを活発にすれば、心の理論の発達につながるとも言われている。続けて指導することでどのような精神的な発達が見られるか評価していきたい。</p>
保管場所 又は所有者	本校 2F ホール



活動実践事例

高

自立活動


教科・領域	自立活動（高等部）
名称	スパイダー（重力免荷装置）
写真 使用方法	 <p>導入時： 10月2日 第4回目： 12月4日</p> <p>体幹が不安定な場合は、腰ベルトを2本装着することもあるが、本生徒の場合第4回目の写真のように学習を積むと体幹が安定した。</p>
対象児童生徒 学年・グループ	高等部Fグループ 2年生
素材・作り方等	重力免荷装置（スパイダー）
使ってみて （効果・反省等）	<p>本生徒は痙直型アテトーゼ脳性麻痺の運動障がいを持つ。アテトーゼ型の場合、身体への予測不能な運動や突然の音に対して、原始反射や異常筋緊張を誘発するため、障がい像を理解しスパイダーの活用をすることが重要になる。よって、合同自立活動やケースカンファレンスなどを通じて学院の担当理学療法士や学院長の意見を伺ったうえで実施した。導入時、スパイダーの中でどのような運動が自分の身体に起こるのか予測不能で、重心を身体を中心に集めて安定を図ろうとする様子が写真からみられる。足底接地および、膝関節はロックされたように動きが少なかった。2回目の指導時には、指導者と手をつないでバランスを取り、ジャンプや下肢の左右への外転運動も実行できた。</p> <p>2回目の指導と合同自立活動の日程を合わせ、理学療法士から助言をいただくことができた。その際、本生徒については、左股関節周辺の痙縮が見られ、学院では外転の動きが乏しくなっていたところ、スパイダーにより免荷されることにより、右股関節の外転を自発的に行うことができていたと指摘された。本生徒のスパイダーによる指導の効果を確認することができた。</p> <p>4回目の指導時には、重心移動を伴うボール投げを立位で行うことが可能になった。立位になり、友だちと同じ目線でキャッチボールができる経験は本生徒にとって、心理的な成長をもたらすものと思われる。</p>
保管場所 又は所有者	本校 2F ホール



活動実践事例

高

読書推進

教科・領域	国語・特別活動
名称	読書推進活動（朝読書、読書感想文コンクール、感想画コンテスト）
写真 使用方法	<p>① 読書手帳 読んだ本の題名と簡単な感想を記入し、シールを貼って読んだ本の数を視覚的に把握できるよう取組んだ。</p> <p>② 読書感想文コンクール 本コンクールに参加。生徒の読書への意欲を向上させるよう取組んだ。</p> <p>③ 読書感想画コンクール 入賞作品のカレンダー カレンダーを図書ホールに掲示し、作品への投票を行うことでコンクールへの関心と読書感想画へ興味を高める取組みを進めた。</p>    
対象児童生徒 学年・グループ	<p>①②高等部 FG グループ（生徒 7 名）</p> <p>③全校児童生徒および教職員へも参加を呼び掛けた</p>
取組み内容	<p>① 読書手帳の活用</p> <p>② 読書感想文コンクールへの応募</p> <p>③ 読書感想画カレンダーへの投票</p>
使ってみて （効果・反省等）	<p>① 朝の読書タイムを設定することによって、読書が苦手な生徒も読む機会をもつことができた。読んだ本の題名と簡単な感想を記入し、シールを貼って読んだ本の数を視覚的に把握することができるため、何枚貼ったかを報告して、達成感を感じる事ができた。</p> <p>② コンクールへの応募を目標に、何度もスモールステップで練習し推敲を重ねることによって、感想文を完成させた。作品が実際に入選し賞状をもらうことができたことで、喜びと自信につながった。本コンクールに参加した、他校の教員からも、参加生徒の励みになったという声を聞いた。</p> <p>③ カレンダーを掲示し投票することで、読書感想画という表現がある事への関心が高まった。今回の活動で投票に参加した、児童生徒会役員のメンバーからは、生徒会活動で図書の本の整理やホールの清掃を行いたいと積極的な図書館活動への意欲の向上が見られた。</p>
活動場所	本校 図書ホール